

沖縄島に帰化したヘビ

近年、本来沖縄島には分布しないヘビが多数発見されている。1992～1994年の間に本部半島東部で発見されたタイコブラは新聞をにぎわしたが、その後は発見されていない。

しかし、サキシマハブ、台湾ハブ、スジオの3種類のヘビの定着が確認されている。毒ヘビのサキシマハブと台湾ハブは、人への直接の被害のみならず、ハブ属の雑種も確認されていることから、遺伝的な攪乱をもたらすことも懸念される。無毒ヘビのスジオは大食漢のため、グアム島で多くの小動物を絶滅においやったミナミオオガシラの例のように、沖縄島の特異的な生物相に大きな影響をもたらす可能性が高い。亜熱帯の琉

球列島では、南方のヘビが侵入した場合、定着する可能性が高いため、移入種に対する監視体制の強化と、定着してしまったヘビへの対策が望まれる。

定着した種

サキシマハブ：1976年に糸満市で多数が逃亡し、その後徐々に分布域を広げつつある。また、名護市許田でも、定着している可能性がある。

台湾ハブ：1990年代の中頃に本部半島東部で高密度に生息していることが判明した。サキシマハブに酷似したヘビ。

スジオ：恩納村を中心とした広い地域で採集されている。1986年以前に定着していたと判断される。
(ハブ研究室)



サキシマハブ

台湾ハブ

スジオ

学術交流

東アジア酸性雨モニタリングネットワークへの参加について

酸性雨は工場、発電所、自動車などから大気中に排出された排ガス中に含まれる硫黄酸化物(SO_x)や窒素酸化物(NO_x)が硫酸や硝酸となって雨水に溶け込んだもので、森林の衰退、湖沼の酸性化など生態系への影響が懸念されています。また、近年アメリカやヨーロッパ等で問題になって、汚染物質は、発生源から数千キロも長距離輸送されるため、酸性雨の影響が広範囲に及んでいます。東アジア地域についても、急速な経済発展とともに、大気汚染物質の排出が急増し、大気汚染問題が深刻になってきております。酸性雨の影響も国境を越えて被害が広がる恐れがあるといえます。

そこで東アジア各国が協力して酸性雨問題に対処するため、1998年3月、東アジア酸性雨モニタリングネットワークに関する第1回政府間会合が開かれました。まず1998年から2年間モニタリングを試行的に実施することとなりました。参加国

は日本を含めロシア、中国、モンゴル、韓国及びタイ、インドネシアなど東南アジアの国々を含み、この目的のため新潟県に酸性雨研究センターが設置され、2000年中頃まで暫定ネットワークセンターとして指定されました。酸性雨研究センターは東アジア地域における情報収集、情報交換、精度管理を含めたモニタリングの実施方法の作成、モニタリングデータの解析、評価を行い、また、同時に日本国内のセンターとしての役割を担います。

日本国内の測定地点は参加国中最多の10カ所で、利尻(北海道)、竜飛岬(青森)、小笠原(東京)等と共に、1994年本県国頭村辺野喜に設置された国設国頭酸性雨測定所がネットワーク測定局として位置づけられました。同測定局の維持管理は当研究所が担当することとなり、またモニタリングに伴う各種調査にも参加することになっています。沖縄は周囲を外洋に囲まれ、比較的大気汚染物質の影響の少ない環境条件の場所と考えられ、また、地理的条件として東アジア地域のほぼ中央に位置しており、酸性雨調査において重要な地点と言えます(国頭酸性雨測定所は今年度沖縄本島北端の辺戸に移設予定)。